



まなび通信

認知能力と非認知能力を一体的にはぐくむために

今年度の京都府教育委員会『学校教育の重点』の中では、「**認知能力と非認知能力を一体的にはぐくむ教育の展開**」が重点戦略として掲げられています。

右の図にあるように、中丹教育局でもこれまでから中丹版「**学力の樹**」として、認知能力に当たる「**見える学力**」だけでなく、その土台と言える「**見えない学力**」、非認知能力の大切さを訴えてきました。

その背景の一つには、AIの発達によって将来多くの仕事が自動化されるという予測があります。そのような時代において今後人間に求められるのは、意欲を持ち創造的に課題を解決する力や、他者とつながる力などです。

それら非認知能力に当たる力は、これまでから学校教育の中で大切にされてきたものではありませんが、今後は各校の取組の中で**より意識的に育成する必要があります**。



令和元年度「中丹の教育」コア会議・学力充実会議

非認知能力について理解を深めていただくため、管内小・中学校の教務主任の先生方を対象とした10月の令和元年度「中丹の教育」コア会議・学力充実会議において、講義及び研究協議を行いました。

研究協議では、非認知能力に関する各校の児童生徒の様子や非認知能力をはぐくんでいると思われるこれまでの取組を交流しました。



非認知能力をはぐくむために ①

日本生涯学習総合研究所では、非認知能力の要素として以下のように整理しています。

問題解決力	批判的思考力	協調性
コミュニケーション力	主体性	
自己管理能力	自己肯定感	実行力
統率力	創造性	探究心
道徳心	倫理観	規範意識
		公共性

このように非認知能力は多岐に渡る、非常に幅広い概念です。そのため、「非認知能力を育成する」という漠然とした目標ではなく、**各中学校区・各校において、目指す子どもたちの姿として具体的に明確にし、教職員で共有する必要があります**。

その際には、「はぐくみたい力」見える化シートを活用するなどして、子どもたちの現状分析から始めることが考えられます。

非認知能力をはぐくむために ②

認知能力と非認知能力は、ともに教育によってはぐくむことができる力とされていますが、その手法は異なります。岡山大学の中山芳一准教授は「**非認知能力は経験と認識によって伸びる**」としておられます。そのため、具体的には以下の2点の取組が考えられます。

① プロセスを見取り、評価する。

教師の言葉かけが「頑張ったね」で終わっていないかを振り返り、取組の過程において価値のあった子どもたちの行動については5W1Hで具体的なエピソードとして伝える。

② 振り返り・自己評価を大切にする。

子どもたちが自分自身の行動を振り返り、文章や言葉として表現することで、自身の行動をより意識させる。